自ら考え　認め合い　たくましく

西小校長室だより

令和７年度　12 月号
（文責　妹尾）

【※西小ホームページのアーカイブを抜粋・加筆しています】

人権ってなんだろう

12 月５日(金)に校内人権集会を開きました。初めは一人一人が真剣に考えた人権標語に関する発表です。各学級の代表が自分の標語を全校の前で発表しました。その後、各学級が今後重点的に取り組んでいきたいことを「人権宣言」として発表していきました。標語は、短い言葉の中に凝縮された大切な思いが伝わる作品がたくさんありました。標語も人権宣言も、出来栄えの良し悪しではなく、子どもたち一人一人が「人権を大切にするってどんなことか」を一生懸命に考えたこと自体に大きな意味があります。また全校縦割り班で競った「なかよしゲーム」では企画した運営委員の思いが伝わってきました。

12 月４日～10 日は全国人権週間です。そして12月10日は世界人権デーと定められています。小学生、特に低学年にとっては、人権における理解や捉えは難しい面があるかもしれません。一言で人権と言っても、いじめや虐待、性被害等の子どもの人権、障害のある人や外国人、性的マイノリティ等への偏見、差別、同和問題等々、幅も広く見えにくいものも多々あります。

人権とは、人が自分らしく幸せに暮らしていくために持っている誰からも奪われない権利のことを言います。小学校で人権を考える意義は、自分を含め、生活を共にするみんなが「一緒にいられてよかったね」「もっと一緒にやりたいね」と思える時間と空間をつくることだと思います。全員が必ず持っている「幸せ行きのチケット」は、色も大きさも形も違うけど、皆同じように価値あるもののはずです。この集会が、かっこいい言葉を並べる時間ではなく、子どもたちが心から「そうありたい」と思い行動するきっかけになってくれることを願っています。

ピコテラス学習

12 月１日(月)に6年生が木次マルシェリーズの2階にあるピコテラスで最新テクノロジーを通した創作活動を行いました。この「ピコテラス」は最新・最先端のデジタル機器が充実したデジタルラボです。

学校・教育現場でデジタル学習支援として活用できるのは、県内でもここだけです。この日は自分でデザインしたスタンプを3D プリンタを使ってつくる活動にチャレンジしました。「ティンカーキャド」というアプリを使ってデザインしていましたが、パソコンに映し出される画面と操作する子どもの様子だけを見ていると、デジタル機器に無頓着な私には、まるでみんながプロのグラフィックデザイナーのように格好良く見えてきました。

決めたデザインはスタッフの方が3D プリンタにつなげてくださいますが、その間に子どもたちは部屋にある高性能 PC や VR ゴーグル、プログラミングロボットカーなど様々な最新デジタル機器に触れ遊ばせてもらいました。それを見て私は再び「はぁー！」「へぇー！」と感嘆しきりでした。10歳～18歳は無料で使用できるそうです。ご家族でも体験されてみてはいかがでしょうか。

おもちゃランド

11 月 28 日(金)に、1年生が西こども園児を招き、「秋のおもちゃランド」を開きました。どんぐりコマやどんぐり迷路、さかな釣り、松ぼっくりのけん玉など、自分たちの手作りおもちゃで遊べるコーナーがたくさん用意され、そのすべてのコーナーで園児を上手にエスコートする1年生の姿がありました。

こども園で交流した時と同様、学校ではいつもお世話される側の1年生が、年下の園児たちと遊ぶ時には、年上の表情や言動になります。それは当たり前のことと言えばそうなのかもしれませんが、年下の子を思いやって活動する1年生の姿に成長を感じます。園児たちも当然大喜びで遊んでいました。活動後の感想を見てみると、「ペアの子がうれしそうに遊んでいて自分もうれしかった」「最初はその遊びができなかったペアの子が、だんだんできるようになってきてよかった」など、相手を意識しながら活動していたことがよく伝わってきました。

書き初め練習会

2学期も残すところあと僅かとなりました。現在は今

学期の総括をすべく学習や活動に励んでいるところですが、12 月 10 日(水)には4年生が冬休みの宿題にもなる書き初めの練習会を開きました。この会には地域ボランティア講師として、幡屋の松田勉さんと春殖の小山伸さんをお招きしました。普段書写(毛筆)の学習で書いている半紙ではなく、長さも幅も大きい条幅紙に大筆を使って書くため、初めに講師のお二人から上手く筆を遣うためのポイントを教わりました。子どもたちは、書いている最中にも時々アドバイスをもらいながら慣れない大筆を走らせ、会場となった食堂には程よい緊張感で少々張り詰めた空気が漂っていました。3年生、5年生、6年生も練習会でお二人にご指導いただく予定です。新年になり自宅で挑戦するときも、この日の心構えとポイントを思い出してほしいと思います。

校長所感　～成長過程の葛藤～

文部科学省の調査によると、全国小中学校の不登校児童生徒数はここ 10 年以上で大きく増加し続けています。背景として考えられる要因は、新型コロナによる生活の乱れや「無理に登校させない」という社会や大人の意識変化、漠然とした不安など様々で、いじめなど明確な事象がある場合を除き、その理由は個々のケースにより異なり、漠然としている状況がほとんどであると言われています。

30日以上欠席の不登校児童生徒の割合は全体の 4%まで増加しています。もし子どもが「学校に行きたくない」または「学校に行けない」と訴えた時、親は、そして学校は、周りの大人たちはどのように対応すべきなのでしょうか。

もちろん正解があるわけではありません。不登校に関する書籍も数えきれないほど出されている中で、私なりの考察を述べさせてもらいます。

「行きたくない」と訴える子どもに「どうして？」と聞き返すと、答えが曖昧だったりノラリクラリ答えたりということはよくあります。不登校や発達障がいの子どもを中心とした個別学習指導に長年携わって来られた公認心理師の植木希恵氏は、登校に困難を抱える子どもの 8 割は理由を明確に説明できないと指摘されています。氏によると、理由を語れる 2 割はいじめなどのケース。それ以外は複合的な要素が絡み合い説明が難しいのだそうです。

しかし、子どもに「行けない」と訴えられると、親は心配になったり焦ったりするのは当然のことです。いち早く原因を特定し解決に向かいたくなるに違いありません。私たち学校の教職員も同様です。ただこれは、いち早く安心を得たい親や教職員の保身に端を発しているのかもしれません。自分の不安を早く取り除きたいのです。原因や理由を聞き出す前に、そこに至るまでの本人の葛藤に心を寄せ、しっかり受け止めようとする大人のスタンスが不登校課題の肝であり根っこのように感じます。

また、行き渋りを訴える子どもの中には、理由を特定できないだけでなく、「理由を敢えて話さない」こともあるのではないでしょうか。親に心の中のすべてを話す義務はありません。ましてや教職員には然りです。それは親や周りの大人に対する裏切りではなく、心の最もコアな部分はその子自身のものだからです。心の状態によっては、自立に向かう過程を一時中断し、甘えたい衝動・誰かを独占したい衝動・自分だけを見てほしい衝動などに突き動かされていることもあるかもしれません。

子どもは「学校に行かないといけない」という思いと、湧き上がる衝動の間で葛藤し、頑張り抜いた結果、勇気をもって「行きたくない」という言葉を発している場合があるのだと思います。無理に理由を尋ねれば、子どもは理由をひねり出そうとすることもあります。ひねり出したその場しのぎの答えは、やがてつじつまが合わなくなり、子どもも大人も混乱することにもなりかねません。まずは子どもの葛藤を理解し受け止めることが大事なのだと思います。ただ、いじめが背景にある場合は別です。的確に原因を見極め、安心を取り戻すことが急務です。ずっとふさぎ込んでいたり、理由もなく泣いていたりしている場合には、ためらわず理由を聞いてみてください。学校現場でも子どもの背景をしっかり見取り、様々な人と連携しながら見極めるよう努めてまいります。

一方で、学校への行き渋りを示す子どもがひねり出した「○○が嫌だ」「○○はしたくない」という一つ一つの理由に全部大人が対応することにも懸念があります。願いを全部叶えようと対応しても、依然学校に行けない現実に、子どもは「どうして自分はこうなんだ」と逃げ場を失い、大人も「これだけやってあげているのに」「怠けではないか」と考えがちになります。子ども自身が変化し自己理解が深まらない限り、自分の課題には向き合えないはずです。腫物に触れるように、子どもの言いなりになることが葛藤の理解ではないはずです。その葛藤に子ども自身が正面から向き合うための支援について、親や学校、周りの大人で一緒に考えていけたらと思います。またいつかの号で、少し踏み込んだ内容で書かせてもらえたらと思います。

荒木輝巳氏の講演会にぜひ

1月 13 日(火)15時～16時に西小学校体育館にて、人権・同和教育講演会を開きます。発達障がいを公表されている落語家の柳家花緑氏の落語会をプロデュースし、60 歳を過ぎて自身の発達障がいを知ったことで考え方が大きく変わったと言う荒木輝巳氏のお話を聞かせてもらいます。底抜けに明るい方です。地域の皆様も元気をもらいにぜひ講演会にいらしてください。

学校のホームページの「児童の様子」を日々更新し、子どもたちの様子をお伝えしています。どうぞご覧ください。